

## 悪魔派バイロンと桂冠詩人サウジー

楠 本 哲 夫

Robert Southey (1774-1843)<sup>1)</sup> から Walter Savage Landor (1775-1864)<sup>2)</sup> へあてた手紙 (1820. 2. 20日付) は次の如く書かれている。

「とても人気を呼んだ流行的詩型が英国に導入されたが 今や 次第に飽きられて 衰微の傾向をたどっているようだ。

それはイタリアで発生した詩型で 即ち Pluci, Berni の 詩風 及び Aristo の流れをくむ 浮かれ気分の、揶揄的、道化た、詩風を 模倣改作したものである。

この詩風は Frere の始めた <sup>アターヴァ リーマ</sup> Ottava Rima である。彼のうたった詩は本質的に 全く善良そのもので 且つ 不快感を与えることなく あまり注目を惹くこともなく 又 そんなに流行して人気を集めるほどのことはなかった。

というのは 彼の詩は 何ものも 誰をも攻撃するものでなかったから。

それは彼の、イタリアの典型的詩風としての〈真面目なもの〉から〈滑稽なもの〉への 移行が 気まぐれ だという欠点をもっていた。

バイロン卿は直ちに この詩風にとびついた。そして先づ最初に ≪ <sup>ベッポー</sup> Beppo ≫ が この詩型で <sup>うた</sup> 詩われたが これは 詩人自らの遊蕩生活を詩ったものである。そして 最後にこの詩型で詩ったのが ≪ Don Juan ≫ であるが これは イギリス文学に残した一大汚点であり伝統的イギリス詩界への大いなる叛逆的

挑戦的行為に他ならぬ。

この詩風は多くの追従的詩人群を続出させた。この Hudibrastic rhyme の Hudibras ——英国詩人 Samuel Butler (1612-80) 作の諷刺的物語詩 <sup>ヒューディブラス</sup>《Hudibras》の主人公 Sir Hudibras は せむしで、知ったかぶりで、頑迷きわまる、長老教会派の保安官である。このイギリス製ドンキホーテが、さびた甲冑に身を固め、やせ馬にまたがって、世のもろもろの悪を退治に出かける。お伴のサンチョーは独立教会派の Ralpho である。かくてこの両人が遍歴の途中、彼らの偽善と利己主義とを痛快に暴露するのである——の名は Spencer が《Faerie Queene》の中でプロテスタントに与えたもの。この諷刺詩は三部よりなり 非国教徒を冷評、嘲弄したもの。構想は <sup>ドン キホーテ</sup>Don Quixote に借りており、8音節対句の mock-heroic の形式を使用している。

この詩形の使用（イタリア詩風とちがう唯一の点）がバイロンの、この詩風をととても easy-writing なものにしてている。」（The Life and Correspondence of the late Robert Southey, ed. C. C. Southey, 1849-50, V, 21）

バイロンは 《チャイルド ハロルド》に続いて 矢継ぎ早やに詩った 《マンフレッド》までの作品の中で主旋律として流れ、自他共に許した〈バイロン トレードマーク〉となった あの詩風、〈黒い喪服を纏った 憂愁な人物〉として登場する Byronic image がマンネリズム化したことに行き詰まりを感じこれを打破し 自らに新風を吹き込もうと 腐心するようになっていた。

流石に バイロンも 追放後の流滴の我が身をしみじみと想うて やりきれぬ憤懣と憂愁が黒雲の如く深く覆う重苦しい方寸のカメラに焦点を定めることのできぬ いらだちを感じていた。 明るい世界へと暗中模索する焦らだちを感じていた。

だから意図的に この詩風より脱皮しようとしていたからこそ このイタリ

アの詩風を発見したとき <水を得た魚の如く> 自己にぴったり適した詩風として これに飛びつき 挑戦し 見事に自らの詩風の転換に成功したのである。そして その詩風を自ら工夫して <格調高く 感傷的に 華麗なもの> を<くだらぬ 平凡にして 馬鹿げたこと>と諷刺的に並列している。つまりその詩風は easy-going に 口語体で 陽気に唄い始められた。行動詩人 バイロンの、自らの道を切り開いてゆく 作為的諷刺詩人への 見事な転身である。

脱線的にストーリーを展開し 道化たライム 特に女性韻を多用、工夫した特技は ずばぬけて 冴えている。華麗なる転身を <Beppo> (1818, 2, 18 出版) の作品に見る。

何故に Southey は、ゲーテの激賞したこのバイロンの一連の諷刺的作品としての、<Beppo>より <Don Juan>に至る名作の文学的価値を、従来の英国詩の伝統に照らし、一大汚点として 片付けようとするのか。甚だ もって 了解に苦しむ。

詩の真価を 道徳的基準に照らして評価しようとする Southey の凡庸さをバイロンはかつて 若きケンブリッジ時代 <English Bards and Scotch Reviewers>の中で Southey は <詩の売人>にして<変節者>として 徹底的に 打ちのめした。

そして この Southey 作 <ある審判の夢>の序文での あの けしからぬ バイロン批評のことば故に、バイロン作 <審判の夢>は Parody として 完璧にして 欠点のない 珠玉の名篇として唄はれ Southey の<ある審判の夢>は愚弄され 汚名を後世に残したのである。

<ある審判の夢>の序文の中で Southey は述べている。

この詩の中で 基盤となっている韻律上の原則を説明したのち 更に次の如く 言及している (xvii)。

「バイロン卿の このような詩風の革命について読者大衆は 格別に 耐え得ない立腹を感じているのを はっきりと 私は気づいている。少くとも読者大衆は、にやけた 乃至 御都合主義の、そのような異国の詩風にがまんできない憤りを感じている。

私は この文字通り、耐えられぬ大衆の憤りが 更に健全な判断の影響の下に、世の倫理道德が 一つの創作の在り方よりも、より重視されるものとなつて欲しいと切望するものである。その詩型よりも むしろ その詩精神の在り方に私は言及しているのである。

民衆の耐えられぬ怒りが あの <恐怖と嘲笑揶揄、みだら、わいせつ、そして 神を怖れぬ不敬> という黒い四つの目を併せもつ怪獣の撃退へと向けられることを切望している。

そしてそれら怪獣故に 当節 英国詩界は先ず すっかり汚染されてしまった。この半世紀以上の間 英文学の世界は その道德性の純粹、その影響、そして順次、国家的良風美俗の故に顕著であり ぬきんでいたのであるが……

以前は 世の父親は子供達に 邪悪の影響を与える危惧の念はいささかもなく 新聞で紹介される どのような書物でも渡すことが出来た。何故ならその書物の 第一面か扉に 売春宿の内容を意図する如き明かなしるしは決して載せないことが保証されていたから。れっきとした出版社の名をもち、ちゃんとした書店で手に入るすべての本は子供に与えて危険性は全くなかった。

このようなことは英国の詩の場合、特に真相だった。ところが 現代はそ

うでなくなった。そのような罪をもたらす元兇たる詩人に禍あれ！ そのような罪をまく詩人の才が秀れているだけ それだけ罪はより深いのである。そして その詩人の恥辱は より永続するであろう。

法が本質的に この重大な悪を減ずることができないならば 又 法が無気力故に このゆゆしきことを管理処置し得ないならば 罪人の名声がほしいままに放置されている現状であるならば 良民の個人個人が 心して、かかる有害な作品が出版されないよう真剣に考えるべきであり そして又 世論によって考えてゆくのが当然であると思はれる。

だから かかる書物を買ったり かかる書物を家の中に持込む者を許すものはすべて かかる危害を促進し かくて その不都合がそのような各人に掛かっている限り その罪の助長者 教唆者となるのである。

そのみだらな書物の出版は 最悪の罪の一つとして社会の幸福に背く行為の一つである。その結果は きわまることを知らぬ最も大きな罪となって ふくらみ行くのである。 その作家は以後 いかにも悔いても その悪影響を償えるものではない。 ありとあらゆる自責の念を、時がくれば、彼は感ずるであろうし その時はきっとくるのである！

臨終を迎えるときの 彼の胸をうつ自責の念故の痛みは、国外へも送られた万卷の彼の書故に 到底 取消すことはできないのである。その罪 万死に値する。その悪書の読み続けられる限り その限り彼は後世の子孫にとって売春仲介者となり その心中深く罪を蓄積してゆくのである。

この私の評言が  
＜悪書の出版に当って いささかの罪の意識もなく その軽率、無思慮さを、ちょっとばかり温い心で着色 修正 装飾し、人間どもが自ら好む悪徳を言い

のがれる文句で認める如き、自己を欺く> 悪徳作家に向けられるとき

彼らが当然受けねばならぬ罪としては まだ、なまぬるい ものなのである。

みだらな若者の無思慮と泥酔癖は最早や 弁解の余地はないが だが 真面目な成人となったとき 慎重な熟慮ある目的意識をもって書いている作家としては、しからは 如何なる返すべき言葉をもつであろうか？

彼らは

(1) 自らの不幸な行いにふさわしい考え方を培って その揚句 人間社会の最も神聖な法に叛逆し

(2) 彼らの努力や虚勢にも不拘、全面的に背くことの出来ぬ啓示宗教 特にキリスト教を憎悪しつつ 人の心の中に深く喰いんでゆく背德的腐蝕ヴィールス菌を撒き散らすことで 自らをも 他をも 惨めにしようと努める

病んだ心と想像力の墮落した人間なのである。 彼らのうち建てた一派は Satanic School <悪魔派>と呼ばれるのが最も適当であろう。 というのは 彼ら一派の作品には 好色的部分で 悪魔 <sup>ビ-リアル</sup> Berial — Milton の《Paradise Lost》(失樂園)の中の墮落天使の一人——の精神、そして又、彼らによるこんで描こうとする様々な 極悪、残虐、恐怖の忌わしきイメージには <sup>モーレク</sup> Moloch —セネ族の神： 子供を犠に<sup>いけにえ</sup>して祭った——の精神が息づいていて それに結びつく絶望という悲惨な感情を露に<sup>あらわ</sup>曝け出しているからである。

この悪は 倫理的のみならず 政治的なものである。 というのは倫理的悪と政治的悪は密接不離に関連しているからである。

政治の破壊は 直接的 本来的に その原因として 数学のすべてと同様確

実に諸の主題の全般的頹廢から実証、演繹されることは実に、吾が最も有能な、且つ最も賢明な論客の一人 Robert South (1634-1716)——有名な英国国教会の論客、且つ伝導者、神学博士——によって判断されている。

Machiavelli——1469-1527。フィレンツェの政治学者。《君主論》の著者。——によって最もしばしば 強調された金言は

「一国民の風俗 慣習が全般的に墮落したところでは その政治が 永続することは 絶対に有り得ない」 ということである。

そしてこの金言こそ あらゆる歴史が例証する事実である。かくして かかる墮落、退廢が 清明な文学界の源流を毒することによる程 より確実しかも迅速に まき散らされる手段は他には有り得ないのである。

一刻も早い将来 施政者達がこの現状を改めて眺め 配慮して欲しいものである。

しかし—— South のことばを借りるなら——もし吾国の名医達が ある病を治療する最良の処置は その病をそのまま放置することであると考へるなら 慈悲深き神は 吾が王国に対して 奇蹟によってのみ神が救い得るものを準備し それを経験させることであろう。

私の評言に対して いかなる申し開きも無用であろう。悪魔派の提供したこの由々しき、倫理汚染、英詩界を揺さぶるこの悪の問題は当然のことながらこの様な評言へと通ずる。即ち私としては 積極的に機を失せず かかる評言を積極的に提供する。何故なら その意見がなんらかの影響力を社会に対して及ぼすであろうすべての人、作家の各自にとって、人間の美德と人類の幸福の根底を破壊すべく意図する作家群の趣旨とねらいを露くことが 火急の義務な

のであるから。」

サウジーの評言は バイロンの ≪ベッポー≫は<作者の不品行を暗示>しており、 ≪ドン・ジュアン≫は<英文学に醜い汚点を残すもの、英詩に対する叛逆行為>であるとして バイロンを糾弾し 故に この一派は<悪魔派>と呼ばれるのが 最も適当であろうと 述べる。

上述の如く 桂冠詩人 サウジー<1813年 任命さる>は Oxford 大学の学友にして散文の大家、ランドーに宛てた手紙の中で「バイロンの書いた イタリア詩風による≪ベッポー≫、≪ドン・ジュアン≫が、英詩の伝統に一大汚点を残し かつ 叛逆を試みたものとして その罪は深い」と述べ、又、

≪ある審判の夢≫ (1821) の序文の中で

- 1) この半世紀の間 英文学の道徳的に高き伝統がみだらな詩によって汚染されつつある
- 2) かかる詩を出版することは 人間社会の掟に背き キリスト教を憎む者故に<悪魔派>と名づけて然るべきである
- 3) かかる一派は 国家の基盤を危くする輩故に 政府はかれらに勧告の要あり

と述べたことが バイロンの怒りを買った。

これに対しバイロンは≪ドン・ジュアン≫三巻 (1821, 8 出版) で サウジーを 諷刺する。この巻に登場する吟遊詩人は、サウジーの如く 情勢に応じ変節し 時の権力に追従して歌う詩人として 描かれている。

バイロンは サウジーが、 スコットの辞退した桂冠詩人を、快く受けたこ



とにも そもそも サウジーの変節的傾向を熟知する故、生理的嫌悪感を抱いていた。元来 桂冠詩人なるものを憎悪し軽蔑視していたのは いかにもバイロンの的で 肯けることである。

1821. 12. バイロンは 《フォスカリ父子》の補遺の中でサウジーの政治姿勢を諷刺している。

- 1) 先ず サウジーの述べた 社会の安寧と出版物の関係について フランス革命の真の原因は ルソーやヴォルテール等の著書のせいではない。  
(それは政府の厳しい取立てのせいだ——)
- 2) サウジーは 急進思想から保守的立場へ変節した男である。—— Oxford 大学在学中フランス革命の急進思想に共鳴し、コウルリッジと共にアメリカに共産的理想国家〈<sup>パンティソクラシー</sup>pantisocracy〉を建てようとしたが、彼の変節により失敗、 後年 保守主義者に転身——
- 3) スイスから帰国してから作り話を流したこと——1818, 11, 11 付のホブハウス宛の手紙で バイロンは次の如く書いている 「あの野郎はスイスから帰国すると シェリーと僕が近親相姦の盟約を結び二人の主義をそれぞれ実行した と言った。奴は嘘つきだ。 女達は メアリ とクレアで メアリは、メアリ・ウォルストーンクラフトとゴッドウインの娘だ。いま一人のクレアは 現在のゴッドウイン夫人と前夫との間の娘 なんだから、二人は姉妹ではない
- 4) 《ワット・タイラー》や 王殺しの詩を書きながら ジョージ三世を聖別化するという矛盾した考えの持主 サウジーが 来世における他人の魂の行方を語るなんて 茶番劇で 笑止千万 かつ冒瀆的である。——《ワット タイラー》は サウジーの書いたもので 1381年に農民に一揆を起

こしたワット・タイラーを主人公とする、急進思想を説いたもので、サウジーがジャコバン思想に取りつかれていた1794年に書かれ、1817. 2. に突如出版されていた。ところが1817年には サウジーは全く立場を変え保守党員であり 桂冠詩人として急進派の連中に 激しい攻撃を加えていた。皮肉にも かかる全く不<sup>ぶ</sup>様<sup>さま</sup>な立場に対し この作品が扇動的であるとして 大法院も サウジーの著作権を守ってはくれなかった。

この件につきバイロンは 1817年5月9日付で ジョン・マレー宛にローマから書き送っている

「サウジーが ワット・タイラーを書き 後の王の生誕や勝利のオードを書くのは別に恥ではない（もっとも、その政治性についてのことだが）としても、自分がかつて考えたように現在考える者たちを火刑にしようと努めたこと（サウジーという男はこんなことまでやりかねぬ奴だが） これは どう説明するのか。その理由は他でもない。自分が考えたことが 都合がよいと分かったのに 彼らは未だ意見を変えていないという 只それだけのことなんだ」

とに角 変節者、御都合主義のサウジーが権威に 世の中に 迎合 追従する姿勢にはバイロンは むしろ あきれ果てる程に サウジーへの嫌悪感、を抱き 蔑視し 愚弄したい衝動にかられていたようだ。

世の中の〈偽善〉と〈から念佛〉を嫌い 権威に対して 不義不正を露くことが バイロンの生涯をかけた 一念ではなかっただろうか。

〈自己の心に忠実に 自己の心に瞬時も、寸豪たりとも背くことができなかつた〉 バイロンは 自己の心のままに 民衆と共に 怒り猛り狂い かつ泣き かつ笑い 露わな心そのままに生きた。故に腐敗した英語貴族社会から 墮落した英詩界から 叛逆児として 追放された。彼は それをせせら笑いながら むしろ 妥協を許さない真の愛国者として いつの場合も 誇り

高く終始した。

Sincerity <真摯>と Power <情熱>の人間詩人 バイロン に対して  
サウジーの浴びかけたことは――

「英詩界の倫理的高潔な伝統に醜き汚点をのこし 英国の良風美俗に悪のをヴァ  
ィールス菌をまき散らす 悪魔派バイロンは 葬るべし」

――が 追放後のバイロンは苦しみ悶えつつも、傷心の身を流滴の地において  
いささかも 自己の心を偽ることなく自分の心の隅々まで露わに唄い続けた、  
その《ベッポー》に、《ドン・ジュアン》の珠玉の名作に 無遠慮にも投げ  
かけられた。

<sup>あたたか</sup> 滋いコスモポリタン バイロンには<<sup>しいた</sup> 虐げられた民を救う>という熱血がた  
ぎり 彼ら大衆という大きな味方を率<sup>ひき</sup>いている。

勇者バイロンには 恐るべき敵はない。

果して バイロンは サウジーに対して、<フランス海岸を名ざし、友人キ  
ネヤードを通じ 血闘>を申込んだ。(キネヤードは これをサウジーに送ら  
なかった為、ことなきを得たが……)

しかし――

サウジー が《ある審判の夢》で バイロンを<悪魔派バイロン>として  
片付け 葬ろうとしたが故に、バイロンは 《審判の夢》によって この  
<きびきびとした小気味よいパロディ> によって サウジーを<俎上の鯉>  
として 料理した。

バイロンは<sup>ざこ</sup> 雑魚は相手にしないが、さすがに サウジーの 《ある審判の

夢》の序文での〈いわずもがなのへらず口〉には肚をすえかね 報復した。

サウジーの《ある審判の夢》の詩の流れの拙劣さを バイロンの《審判の夢》は

痛風にかかった脚、  
飛節内腫や蹄葉炎にかかった馬の脚

と諷刺し 愚弄する。

桂冠詩人 サウジーも この《審判の夢》によって、バイロンの 報復によって 英詩上単なる凡庸なる詩人として 二度と立ち上がれない迄に 殺されてしまうのである。

そしてバイロンのこの 《審判の夢》 は不朽の名篇として 後世に残った。その冴えた筆致は 諷刺詩として完璧なまでに理想的な名作として讃えられた。

バイロン卿には 手を出すなよ  
後の崇りが こわいぞよ！

#### 参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford, Byron: Hutchson.
- 2) Ernest Hartley Coleridge. The Poetical Works of Lord Byron: Lewis Prints.
- 3) Leslie A. MArchand, Byron's Poetry: John Murray.
- 4) Bernard Blackstone, Byron: Longman.
- 5) John D. Jump, Byron: Rortledge & Kegan Paul.
- 6) Lafcadic Hearn, The English Romantic Poets: 北星堂。